

ム、ウエーキ等の攻略作戦を一齊に開始したのである。

才一章 南方攻略作戦の初動

一、南方軍及び聯合艦隊の指導

○南方軍の統帥発動

昭和十六年十一月六日、南方軍総司令官に親補せられた寺内陸軍大將は、同日大本營陸軍部に於て、參謀総長杉山大將から「南方要域の攻略を準備すべき」旨の大本營命令の傳宣を受けると共に、「南方軍作戦要領」及び「南方作戦陸海軍中央協定」を示達せられた。この際參謀総長は、南方軍総司令官に対し左の要旨の要望を開陳した。

南方軍総司令官に対する要望

皇国非常の秋に際し、閣下南方軍統率の大命を拜せられ闊外の重任に就かる。誠に慶祝の至りに堪えざる次才なり。

就ては左に若干の要望を述べんとす

昨五日御前会議に於て、帝国は対米英蘭戦争を決意し武力発動の時
機を十二月初頭と定め、作戦準備を完整すると共に対米交渉を継続
し、十二月一日零時迄に之が成功を見ざる場合には断乎武力を発動
すべき御聖断下されたり。

而して右の御決定は対米交渉成立せざる場合に於て武力発動を実施
する如く定められあるを以て特に軍は大命の下其進止を明かにする
ことは勿論、他面向後につける対米交渉経過の如何に拘らず作戦準
備の完整に邁進し、聊かの懈怠有るを許さざるは茲に多言を要せざ
る所なり。本件決定国策の趣旨を体し且統帥部の眞意を諒とせられ
度切望に堪えざる次第なり。

尙命令中にも示されたる如く作戦準備間万一米英蘭軍の攻撃を受けたる場合は、自衛の爲之を邀撃することを得るも此際紛争の事態を局地に解決し不期の開戦に至らざる如く特に万全の注意有らんことを切望す。又作戦準備間は固より作戦実施間に於ても印度支那及泰國に対しては従来通り勉めて友好關係を保持し政略上大局の不利を来さざる如く留意せられ度。

而して一層開戦とならんか帝國は政略兩略の手段を盡して戦争の短期終結に勉めざるべからず。然りと雖も其の終末は遽かに予測を許さざるものあり。正に警国以来の大業にして軍の責務眞に今日の如く重且大なるはなし。

希くば作戦の企画指導宜しきを勵し特に帝國海軍との協同に遺憾な

からしめ、速かに作戦目的を完遂し、全局の戦争指導に絶大の寄与
有らんことを切望して止まず。尙作戦計画其の仲に諷しては後刻幕
僚をして説明せしむ。

寺内大将は当時の陸軍に於ける現役大将の長老であり、それ迄軍事
参謀官の職に在つた。南方軍總司令部は、秘密裡に陸軍大学校に於て
編成せられ、總参謀長以下幕僚の補職を見、直に作戦準備業務を開始
した。總参謀長には特に参謀次長塚田^{オサム}攻中將が選ばれた。

寺内總司令官は、大本營より示された作戦要領及び陸海軍中央協定
に基き、南方軍の作戦計画を策定し、十一月十日隸下各軍司令官等を
大本營陸軍部に招致してこれを内示し、作戦準備に關する命令を下達
した。

同日寺内総司令官は、聯合艦隊麾下の南方部隊指揮官たる才三艦隊司令長官近藤信竹中將と陸軍大佐に於て会見して、南方作戰に關する所要の協定を行い、又十四日には寺内大將隷下各軍の指揮官及び幕僚は近藤中將麾下各艦隊の指揮官及び幕僚と山口県岩國に於て会合し、協力する各陸海軍毎に所要の協定並に作戰打合せを実施した。

かくして作戰準備業務が逐次進捗するうち、十一月十五日午前零時を以て南方軍戰鬥序列に基く各軍及び部隊の隸屬關係が成立し、ここに南方軍の統帥^は發動せられたのである。尤もそれ以前に於ても、南方軍總司令官は作戰準備に關し各軍を区処し得る如く定められていた。

○南方軍の作戰計画

右南方軍統帥發動の日に、南方軍總司令官は、才一卷既述の如く「南

七

方要域を攻略すべき」旨の大本營命令を受領した。任務達成の爲の
方軍作戦計画の骨子は次の通りである。

南方作戦の目的は、東亞に於ける米国、英国及蘭国の主要なる根拠
を覆滅して、南方要域を占領確保するにある。

作戦は之を三期に区分し概ね左の如く指導する。

第一期作戦

馬來に対する先遣兵団の上陸と比律賓に対する空襲とを以て同時
に作戦を開始し、続いて航空作戦の成果を利用し、主力を以て先
づ比律賓に、次で馬來に上陸せしめ速に比律賓及馬來を攻略する。
別に開戦初頭一部を以て英領ボルネオの要地を急襲占領する。
以上の間成るべく速に蘭領ボルネオ、セレベス、モルツカ並にチ

モールの要地を、次で馬來作戦の進捗に伴い、南部スマトラの要地を占領し、爪哇に対する作戦を準備する。

才二期作戦

速かに爪哇方面の敵航空勢力を制圧して同島を攻略する。

才一期才二期作戦間機を見て、南部緬甸の航空基地を奪取する。

才三期作戦

占領地域を安定確保し、状況之を許す限り緬甸処理の為の作戦を行う。

右作戦の為南方軍に充当された兵力は、十一箇師団と二箇飛行集団を基幹とするもので、各方面に対する兵力部署の概要は次の如く定めらる。

一、比島方面

才十六師団及才四十八師団を基幹とする才十四軍をして作戦せしめ才五飛行集団をこれに配属する。

二、馬來方面

近衛師団、才五師団、才十八師団（川口支隊欠）及び才五十六師団を基幹とする才二十五軍をして作戦せしめ、才三飛行集団を南方軍直轄の下に主として馬來方面の航空襲滅戦及び地上作戦協力に任せしめる。

但し近衛師団は初期才十五軍司令官の指揮下にあつて泰国の安定確保に任ずる。

三、泰國及び緬甸方面

才三十三師団及び才五十五師団を基幹とする才十五軍を以て泰國を安定確保すると共に、馬來方面の作戦を容易ならしめ、併せて緬甸方面に対する作戦を準備する。

初期近衛師団を其の指揮下に入らしめ、又比島方面の情勢許すに至れば、才五飛行集團を該方面に転用す。

四 佛領印度支那方面

才二十一師団を以て安定確保に任じ、特に重慶軍の侵入に対し警戒する。

五 蘭領印度方面

才二師団、才三十八師団及び才四十八師団を基幹とする才十六軍を以て作戦せしめ、才三飛行集團を馬來方面の作戦に引継ぎこれ

に協力せしめる。

但し才三十八師団及び才四十八師団は、夫々開戦当初香港及び比
律賓の攻略に任じたる後之を転用せしめられる。

六、ボルネオ方面

才十八師団の歩兵才三十五旅団（一聯隊欠、旅団長川口清健少将）
を基幹とする川口支隊を以て作戦せしめる。

○南方軍の南方攻略命令

守内総司令官は大本營命令及び右作戦計画に基き、十一月二十日東
京に於て、隷下各部隊に対し左の如き要旨の南方攻略に關する命令を
下達した。

南方軍命令

1019

一、大本營は帝國の自存自衛を完うし大東亞の新秩序を建設する為南方諸地域の攻略を企図せらる

二、南方軍は海軍と協同し速に南方要域を攻略せんとす

主作戰を先づ馬來及比島方面に指向し兩方面に対する同時作戰を開始し短期間に作戰目的を完遂す

進攻（進入）作戰開始に關しては別命せらる

三、第十四軍は左記に據り比島方面の敵を擊破し其の主要根據地に首都マニラを迅速に攻略すべし

四、開戦劈頭呂宋方面の敵航空勢力に対し空襲す

五、先遣諸隊を以て航空才一營の前日以隆夫々其の集合點を出發し

呂宋島北部及レガスピー附近に上陸し航空基地を占領す

航空部隊は右に伴い航空基地を推進し航空作戦を続行す

一四

3. 軍は右作戦の成果を利用し作戦が十五日頃迄に主力を以てリンガエン湾附近に一部を以てラモン湾附近に上陸し速かにマニラを攻略す

四. 第二十五軍はシンガポール攻略の爲左記に據り先づ馬來方面に急襲上陸を敢行し且勉めて南方に地歩を獲得すべし

1. 有力なる先遣兵団を以て作戦開始日零時頃以降泊地に進入し中部馬來半島東岸に急襲上陸し速に航空基地を占領し且勉めて前方に地歩を獲得す

2. 軍主力は概ね作戦が二十六日頃迄に夫々南部泰に上陸を開始し当面の敵を撃破しつつ馬來西海岸方面を南下突進す

五才十五軍は開戦初頭泰国に進入し才二十五軍の作戦を容易ならしむると共に勉めて同国の安定を確保し且同方面よりする対蔣封鎖を実施し併せて緬甸に対する爾後の作戦を準備すべし

六才三飛行集団は開戦初頭先づ主として英領馬來方面敵航空勢力を攻撃し次で一部を以て緬甸方面敵航空部隊を殲滅すると共に主力を以て才二十五軍一部を以て才十五軍の作戦に協力すべし

七才十六軍は速に一部を以てダバオ、ホロ島及タラカン島を次でバリックババンを占領し所要の航空基地を獲得すると共に資源要域を確保すべし

才十六軍はバラオ島集合點に於ける警戒等に関し才十四軍の部隊を区処すべし

ダバオ占領部隊の集合點出發日時に關しては才十四軍の区処を受
くべし又ダバオ占領後才十四軍の部隊は同軍に復歸せしむべし

八川口支隊は開戦後集合點を出發し先づミリ、セリヤを攻撃して重
源要域並に航空基地を確保し引続き成るべく速にクチン附近飛行
場を占領すべし

九比島、英艦馬來及緬甸等の占領地に対しては治安を恢復し国防軍
要資源を取得し且軍自活の途を確保する為才十四軍、才十五軍、
才十六軍、才二十五軍及川口支隊は夫々当該方面の軍政施行に任
ずべし

大作戦時刻は日本中央標準時に依るべし

去予は東京に在り十一月二十五日出發先づ台北に到る

右命令は、開戦後四十日乃至五十日間に於ける隸下各軍及び兵団の
作戦行動を律せんとするものであつた。そこで第十四軍に対しては、
比島方面の作戦目標たるマニラ攻略迄の任務を与えられたが、その他
の軍に対しては、作戦初動の任務のみが与えられた。命令傳達の為総
軍作戦参謀荒岸興功中佐は、飛行機で台北、廣東、西貢に飛んだ。当
時第十四軍司令官は台北、川口支隊長は廣東、第十五、第二十五軍司
令官及び第三飛行集団長は西貢に夫々位置していた。

の「壽甲老五号」發令

寺内總司令官及びその幕僚等は、隱密裡に十一月二十五日台北に進
出した。

寺内總司令官は、和戦の判断決定が十二月初頭にたされることを知

つており、又その幕僚は大本營幕僚との間に開戦の場合に於ける進攻作戦開始の命令、即ち第一巻既述の大陸命令五六一九号（第一巻）に就て予め打合せが済んでいた。

十二月二日、南方軍は大本營より右營命令發令の軍機電報に接するや、直に午後四時四十一分隷下各軍に対し、「壽^{コウ}甲^{コウ}五号ヤマカタとナシ」と緊急打電した。この電報受領と共に開封すべき密封命令が予め各軍に送達せられていた。それは云う迄もなく十二月八日進攻作戦を開始すべき南方軍命令であつた。

南方軍總司令官は十二月四日西貢に進出し、第二十五軍先遣兵団は同日早朝三原を出港した。又第三飛行集團は華南及び北部佛印の中間展開位置より南部佛印に進出して、五日展開を完了した。この頃南方

軍は英軍が我に先立ち泰國に進入した場合、又は英軍時として米軍が眞面目な空海の先制攻撃を加えて来た場合等の作戦指導に關しても、眞剣に劃策し、これに伴う作戦命令を準備していたが、何れも發動には至らなかつた。

○聯合艦隊の作戦要領

十一月五日、聯合艦隊司令長官山本五十六大將は、作戦準備実施に關する大本營命令を受領するや、同日直に佐伯灣旗艦長門に於て、「聯合艦隊命令作 才一號」を以て、聯合艦隊の作戦計画を示達した。右作戦計画は固より大本營との内連絡に基き、事前に作成せられていたものである。

海軍は南方要域の攻略標成迄の間の作戦を才一段作戦、爾後の作戦

をカ二段作戦と区分し、聯合艦隊はカ一段作戦を更に左記の如く三期に区分した。

二〇

カ一期作戦

開戦より樺ね比島攻略陸軍主力上陸完了迄の作戦

カ二期作戦

カ一期作戦後より樺ね英領馬來攻略陸軍主力上陸完了迄の作戦

カ三期作戦

カ二期作戦後より蘭印攻略作戦一段落迄の作戦

カ一段作戦に於て、南方軍と協同して南方攻略作戦に任ずる海軍は、近藤カ二艦隊司令長官の指揮する南方部隊であつた。南方部隊は、カ二艦隊、南遣艦隊及びカ十一航空艦隊を基幹とするもので、その作戦

方針は概ね次の如きものであつた。

南方部隊は局所に優勢を持しつつ比律賓、英領馬來及蘭印方面所在敵艦隊を掃蕩撃滅すると共に陸軍と協同して左の如く作戦す

(1) 英領馬來及比律賓に対し同時に作戦を開始し同方面所在敵艦隊兵力及艦隊に対し制空襲撃し反撃攻撃すると共に、成るべく速に陸軍先遣兵団を馬來及比律賓次で英領ボルネオの要地に上陸せしめ航空部隊を推進し航空作戦を強化す

(2) 前項作戦の成果を待ちて陸軍攻略兵団の主力を比律賓次で馬來に上陸せしめ速に之を攻略す

(3) 作戦初期セレベス次で蘭領ボルネオ、南部スマトラの要地を、又機を見てモルツカ諸島、チモール島の要地を占領し所在の航空基

地を整備す

(二)前項の航空基地整備次第に逐次航空部隊を推進して爪哇方面敵航空兵力を制圧し其の成果を待ちて陸軍攻略兵団の主力を爪哇に上陸せしめ同島を攻略す

才一段作戦中に米国主力艦隊が来攻するかも知れぬと云うことは当然予期せられた。この場合の大本營の考えは、比島及び馬來作戦は依然これを継続する方針であつたが、聯合艦隊は才三艦隊及び南遣艦隊のみをこれに充て、その他の部隊は擧げて対米邀撃作戦に轉移する計画であつた。

前記作戦方針に基く南方部隊の兵力部署の概要は左表の通りである。

官 指 揮	
隊 部 空 航	隊 部 来
官長司令部航空第一十少	官長司令部艦隊
陸上航空隊五隊 半、艦三所屬機 三〇八	水空母三、陸上航 空隊二隊半、根 據地隊三所屬及 搭載機一九一 航空隊の一 部は中途比島 部隊より増加
オネルボ及印蘭島比	来馬及部南印
一部 ハラオ	方面 新嘉坡 潜水艦 印度南 部及佛
四、ミリ、クチン占領に伴い一部を同方面に 進出対馬來航空戦に参加す 三、常に作戦海面の牽制を行い敵艦艇を捕提 撃滅す 二、作戦の進捗に伴い海次基地を進出して蘭 印方面敵航空兵力を撃滅す 一、比島に対する先制空襲を以て作戦を開始 し速に同方面敵航空兵力を撃滅す	と其に陸軍と協同対馬來航空作戦を実施 三、開戦後成るべく速に陸軍と協同ミリ次で クチンを攻撃急進に航空基地を整備し海 軍航空隊の一部を進出せしむ 四、日頃少二十五軍主力を東南部方面に揚 陸す（陸軍兵力の一部は比島部隊）

二四

1031

三 対 泰 進 駐

○ 進駐交渉開始時刻

泰國を日本の陣營に引入れ、これが安定確保を図ることは、南方政略作戦及びその後の長期持久作戦遂行の為絶対不可欠の要件であつた。然し既に述べた如く、泰國の動向は、ピブン首相の親日的態度と独裁力とに多分に期待しながらも、その複雑な国内事情からして、遽かに逆睹し難いものがあるとされてゐた。又我が方が將に実施せんとしてゐる進駐要領と相似形の措置を、英側が一挙先に行ふのではないかとのきわどい懸念がある状況であつた。当時泰國は激正中立を強く標榜してゐたが、それは日英何れに対しても所詮不可能な実情に在つた。

大本營は、才一卷既述の大本營政府連絡會議決定「対泰措置要領」

に基き、十一月二十四日南方軍總司令官に対し、「対泰措置要領」^{二六}を示すと共に大要次の如く指示した。

一、南方軍總司令官は海軍と連繫し駐泰大使の実施する交渉に伴ひ進入に關する一切の軍事的事項に關し泰國当事者との交渉に任ず

二、前項の交渉開始の時機は X-1 日十八時以降 X 日零時以前と豫定す

三、南方軍總司令官は駐泰大使に対し同大使の実施する対泰交渉開始

の決定時刻を努めて X-1 日十八時以前に通報し且右交渉を援助する

ものとす

四、進入は対泰交渉の成否に拘らず豫定の通実施するものとす但泰國

東部国境よりの進入開始並盤谷に対する直接上陸の時機は情況之

を許す限り日泰兩軍の衝突を回避する如く決定するものとす

五、情況に依り進入以前に交渉を開始するを不利と認むる場合に於ては豫め報告し中央の指示を受くるものとす

六、作戦開始（X日に關する）の命令発令以後我進入に先だち英軍泰に進入するか又は英軍の先制攻撃を受けたる場合並右命令発令以前命令に依り進入する場合の措置は概ね前諸項に準ず

これで明かなよりに、對泰交渉開始の日時は、中央に於て十二月七日午後六時以降八日午前零時前と概定しているが、その確定的時刻の決定は作戦と密に吻合させる為南方軍總司令官にまかされたのである。而して南方軍總司令官は、その決定した時刻を七日午後六時迄に坪上駐泰大使に連絡しなければならなかつた。寺内總司令官は七日に至り、交渉開始時刻を七日午後十二時と決定した。

さて日英兩國勢力の間に立つて、山雨將に至らんとする無氣味な情勢下に、ピブン政府の苦心は実に容易ならざるものがあるだろうことは明であつた。十一月二十七日夕、ピブン総理はラジオ放送を以て左の要旨を國民に訴えた。

泰國人は何れの外國人にも殊更に敵意を持つべきでない。英領馬來や佛印に外國の軍隊が集結したからと驚く必要はない。外國の宣傳に禍されて輕率盲動するな。泰國は宜しく國防力を増進し一朝有事の際に備えるべきである。

英、米兩國大使は共に親善條約に基き友好關係を増進することを希望し、日本大使は日本軍の佛印進駐は決して泰國を侵略する為のものではないと言つてゐる。

泰國民は一致團結して政府の方針を支持することを希望する。

十二月四日駐泰陸軍武官田村浩大佐は、西貢に至り南方軍に対し、佛印より中部泰への進駐を、南部泰進入より暫く遅らせるより要望した。その理田に關し、田村大佐は西貢より大本營に対しても、次の如き報告を寄せた。

小官三日十五時ピブン首相と會談し「日本軍が中央泰への進入を暫定期間控制し泰政府の面目を重んぜられるに於ては日本軍のブラチヤツプ以南泰領への進入は妨害せず且成るべく速かに拳闘積極的に協力する決心なり」との確約を得たり願はくは泰國政府の大乗的希望を察納せられ此の歴史的瞬間に日泰結合の實を打樹て得る如く御
処置賜り度

因みにピブン首相は強烈なる意志を以て泰國政府を指導掌握しある
こと確實なり

そこで南方軍は、友好進駐実現のために中部泰への進駐を八日正午
頃迄遅らせることとした。

○才十五軍の進駐準備

先づ泰國に進入してこれが安定確保に任じ、爾後ビルマ作戦を担当
すべき部隊は飯田祥二郎陸軍中將の指揮する才十五軍一軍參謀長諫山
春樹少將で才三十三師団及び才五十五師団を基幹とするものであつ
た。

才十五軍司令部は大阪に於て編成せられ、十一月二十七日西貢に到
着した。

四国に於て編成せられた才五十五師団（師団長竹内寛中将）は、海路十一月二十六、七日頃主力を以て海防、宇野支隊（宇野大佐の指揮する歩兵才百四十三聯隊基幹）を以て西貢に到着し、又才三十三師団（師団長櫻井省三中将）は当時尙華中に位置し開戦後海路バンコックに前進する如く予定されていた。才五十五師団主力は、海防より逐次鉄道輸送により南下する予定であるが、その行動開始は開戦後に控制せられた。従つて開戦と共に才十五軍が直に使用し得る兵力は、僅かに宇野支隊だけであつた。そこで南部佛印に位置する才二十五軍隸下の近衛師団（師団長西村中将）が、泰圀進駐兵力として一時才十五軍司令官の指揮下に編入されたのである。

才十五軍は既述十一月二十日発令の南方軍命令に基き、翌二十一日

三十一日

近衛師団次で二十五日宇野支隊の泰國進駐を部署した。近衛師団は、
主力を以て陸路より吉田支隊（吉田少佐の指揮する歩兵一大隊基幹）
を以て海路よりバンコックに進駐し、又宇野支隊は海路南部泰寄りの
泰湾沿岸の各飛行場に進駐し、次で速かに南部ビルマ印度洋沿岸の要
地ピクトリヤポイントを攻略する任務であつた。近衛師団主力の進駐
開始は十二月八日払曉と予定されたが、十二月五日に至り、既に述べ
たよりの経緯で、十二月八日正午頃迄遅らさるることゝなつた。
十二月三日飯田軍司令官は、サンジャック沖に宇野支隊の状況を視
察し、伏見丸上に於て宇野支隊に対し、十二月八日泰國進駐を開始す
べきを命令した。

これより先才十五軍は、進駐に伴ふ泰國との軍事折衝処理の爲參謀

副長守屋精一少将以下をバンコックに先遣した。守屋少将は暫て駐泰
陸軍武官を勤めた泰國通であつた。

坪上大使は、[○]ビブン首相行方不明、友好進駐成る
南方軍總司令官からの通報に基き、十二月八日午前零

時泰國との交渉を開始せんとした。交渉相手は直接ビブン首相である
ことが是非必要であつた。然るに七日夜偶然にもビブン首相は視察の
ため東部國境に出張不在であつた。海軍大臣もサタヒツブ軍港に出張
してゐた。交渉は凶らずも大なる齟齬に逢着し、已むなく坪上大使は
八日午前一時五十分要求事項を外務大臣に交付した。当時大本營には
ビブン首相の行方不明が報せられ、日泰兩軍の衝突惹起が憂慮せられ
た。正に九俎の功を一篲に欠くの感があつた。果せる哉、泰側の回答
は午前三時を過ぎるも到着せず寺内總司令官は全般の情勢上予定を交

更し速かに陸路進駐を執行するに決し、八日午前三時三十分之に^三關する命令を下達した。

近衛師団主力は十二月八日朝国境を越えて前進し、九日払隘^四の先頭を以てバンコックに到着した。吉田支隊は六日フコク島を出発し、八日未明バンダ海岸に上陸し夕刻師団主力に先だちバンコックに入つた。

交渉の妥結を見ることなく進駐した為に、二、三の地点に於て若干の紛争を見たが、間もなく泰側は抵抗を中止すべき措置を取り大事に至らなかつた。そして八日正午には日本軍の通過容認にこれに伴ふ便宜供與及び日泰兩軍衝突回避措置の実行に關し、日泰兩國間の諒解が成立した。

他方宇野支隊は、十二月五日サンヂャツク沖を出航し、海軍護衛の下に八日午前八時乃至九時の間主力を以てチュンボン各一部を以てプ
ラチアツブキリカン、バンドン及びナコンに上陸し、泰国政府の停戦
命令徹底するに従い、各上陸点附近の飛行場に友好裡に進駐した。支
隊主力はチュンボンに於て爾後の前進を準備した後、十二月十一日泰
緬国境のクラ河畔に進出し、才十飛行団の協力を得て、十四日夜ビ
クトリヤポイントを攻略し、十九日には一部の海上機動を以てポービ
アン飛行場へビクトリヤポイント北方一四五軒を占領した。

日泰同盟条約の締結

日本軍進駐後に於ける泰国の態度は急速に好転を見、十二月十日ピ
アン首相は坪上大使に対し同盟条約締結を確約した。之に關する坪上

大使の東郷外務大臣宛十二月十一日発信の電報は左の通りである。^{三六}日
泰同盟条約は、十二月二十一日に至り正式に締結された。

一、八日の了解後軍側の希望もあり更に軍事同盟へ進展方工作中的の所本
十日午後七時ビボンより電話あり遼海軍武官帶同往訪す左記趣旨の
應酬ありたる後「対泰措置要領別紙攻守同盟」(但し註を除く)其
の儘受諾せしめたり

二、勞頓ビボンより所見を述べるとて自分(ビ)は豫て御約束せし通決し
て日本を敵とすることなし即ち此の際泰としては対英戦争を決意す
る一途あるのみなる所國民の親英傳統永く其の輿論を対英戦争に導
くこと容易ならず依つて右指導工作才一着手として本夜九時より英
國重慶等の謀略を封ずる為全市に戒嚴令を布くべく又近く内閣改選

を行へし即ち日本側の希望せらるゝ軍事同盟迄には右の如き段階を要すべきものと思わるゝ所御意見如何と言ふ

依つて本使より閣下の御決意は多とし之を信ずるも今日此の際右は何等か具体的に実證せられざる限り閣下の誠意を日本国民將又当地駐在の日本軍に知らしむる由なしと協定案を示し本使として直ちに之に御署名を希望致度と言ふるにビは一説後承諾の意思を表明直ちに署名すべしと答えたり

三然るに生憎当方用意の案文に余部なかりし為明朝案文を用意し署名を了すべき旨約束を取付け引取りたり尙其の節本協定は記録の性質を有すべき旨説明し置きたり

右同盟条約の確約を契機として、泰側の態度は更に協調的となり、

三七

十二月中旬にはビルマ作戦に關する日泰兩軍共同作戦の要綱が決定^{三八}された。その骨子は次の通りである。

一、日本軍はラーヘン—メナド—マイワジ道（含む）以南の地区より蘭貢に、泰軍は右道以北よりケントン、マンダレー方面に夫々攻勢を執る

二、泰軍は前項道路及カンブリー—パウデイ（タボイ東方約百料）道を速かに自動車道に改修す